

協同組合とマルクス主義

——協同組合発展の歴史的弁証法——

井 上 晴 丸

目 次

- 一、協同組合と初期プロレタリアの運動
- 二、マルクス主義協同組合観の展開
- 三、資本主義の消費組合と社会主義の消費組合
- 四、資本主義の農業協同組合と社会主義の農業協同組合
 - 1 プロレタリアートの農民政策と農業生産の社会主義的協同化
 - 2 流通・信用部面でだけ繁茂する資本主義の農業協同組合
- 五、結 び

一 協同組合と初期プロレタリアの運動

協同組合制度の種子は、十八世紀の世界から十九世紀の世界への展開点で、イギリスの空想的社会主義者ロバート・オーエン（Robert Owen, 1771～1858）によって播かれ、資本主義的近代産業の勃興期におけるプロレタリア

ートによって、うけとめられ、初期の苦難にみちた階級闘争のなかで育くまれ、実践的に検証されてきた。マルクス主義の協同組合観はこのプロレタリアートの実践的検証をとおって生れたのである。

十九世紀は、イギリスでは、産業革命のつぼのなかで明けた。資本主義産業の新世紀の開幕と新しい階級としてのプロレタリアートの生誕とが、社会の経済生活全般の大変な激動として、進行する。その有様を一べつするには、エンゲルスが『空想より科学への社会主義の発展』のなかで、たったの十行そこそこという簡潔まで活写した叙述を、借りるに如くはない。

「蒸気と道具を作る新機械とが、マニユファクチュアを近代的大工業に転化せしめ、それが、ブルジョア社会の全根柢を变革しつつあった。マニユファクチュア時代の遅々たる発展の歩みは、生産の真の狂瀾怒濤時代に変った。大資本と無産プロレタリアへの社会の分裂は、不斷に増大する速度をもって進行し、両者の中間には、かつての安定せる中流階級の代りに、今や不安定な手工業者と小商人の大衆、すなわち人口中の最も動揺し易い部分が、危なっかしく生活するようになった。しかもこの新しい生産方法はまだようやくその向上期に入ったばかりであった。それは当時の常態にあつては正常な、正規の、唯一可能な生産であつた。しかしながら、当時はやぐも、それは恐るべき社会的罪惡を生み出しつつあった。すなわち、大都市の最不良の住居区域における浮浪民の堆積——あらゆる伝統による紐帯や、家父長制的従属や、家族制度やの弛緩——とくに婦人および児童の恐るべき程度の過労——突如として全く新しい状態へ、すなわち農村から都市へ、農業から工業へ、安定せる生活条件から日々変化する不安な生活条件へ投げ入れられた労働者階級の大々の墮落が、これである」（引用文は大内兵衛氏の名訳によつた『岩波文庫版二七頁』）。

プロレタリアートは、このようななかで隊列をととのえてゆかねばならなかった。賃金奴隷たちの資本に対する反抗は、或る期間、あたかも奴隷が奴隷主の労働用具を壊したように、機械の破壊という形をすらとった。そのような盲目的・絶望的反抗から労働者たちが抜け出し、しっかりした隊伍をととのえるためには、個人の致富と大衆の奴隷化の手段として眼前に登場してきた新しい巨大な生産力を、社会改造のために役立てうる筈だという信念の獲得が必要であった。マルクス・エンゲルスによる科学的社会主義の生誕をみる以前のプロレタリアートは、空想的社会主義者の思想を糧として、そうした信念を培わねばならなかった。とりわけオーエンによるスコットランドのニュー・ラナーク (New Lanark) での、かの有名な実験（たまたま彼に管理をゆだねられた大紡績工場〔労働者数二、五〇〇人の規模〕を労働者の管理に移し、これを根拠に福祉をラナークの住民全般にまで及ぼそうとする実験——それは一八〇〇年に始まり二九年間持続し得た）のすぐれた成果は、十九世紀前半を通じて労働者階級への無言の鼓舞となった。

（注） 成果としてとりわけ注目される点の一、二をあげれば次の如くである。

当時の紡績工場における労働者の一日の拘束労働時間が一般的に十三時間ないし十四時間であったときに、ニュー・ラナークでは十時間半。棉花恐慌による工場休業にさいしては、当時の紡績工場一般では、休業期間中賃金支払を停止するのが普通であったときに、ニュー・ラナークでは、四ヶ月もの休業期間中、賃金の全額が支給し続けられた。

全社会的規模での協同主義・共産主義的共同体の新しい社会秩序への社会改造を目ざして、オーエンは彼の実際家的・理財的直感力をもって、その都度の諸条件を利用して現実処理する限りでの過渡的諸方策を提唱し、指導した。^{（注）}

(注) 労働バザーの導入はその最たるものの一つである。それは物々交換の市場であり、その物々交換は、その物の生産に要費された労働時間を単位として相互に交換された(労働貨幣の創造を企図する)。そのバザー開市による仲介利益は、彼が目ざす社会主義共同体への社会改造資金に当てらるべきものとされた。めざす共同体社会では商業資本家は不要であり、利殖の道具としての貨幣もまた不要となるべきであった。バザーという実地的な仕事に、そのような理想への接近の意図をおり込み、しかもそこでの利益を、社会改造資金にあてるという一石二鳥には、オーエンの面目躍如たるものがある。ついでに言えば、オーエンは社会改造資金を慈善的な金持ちの寄附にも期待したのだが、オーエンの弟子となった労働者たちは、さすがにそのような甘さまでは、当初から引きついでいない。

協同組合制度の導入は、それらの過渡的諸方策のもっとも重要な一環をなすものであった。彼の考える協同組合制度には、労働者の生産組合と労働者の消費組合との双方を含んでいた。前者は将来社会での産業資本家を不要とする社会的生産の芽生えと目されたのであり、後者は将来社会での商業資本家のみならず貨幣をも不要とする新しい流通秩序の芽生えと目されたのであった。そしていずれにしろそれらの協同組合企業が現社会で手に入る企業収益は、一石二鳥的に社会改造資金の源泉を提供すると考えられた。このような協同組合制度の意義づけは、とりわけ労働者の階級意識の高まりに形を与える一つの契機をなした。このような意義づけによってこそ労働者たちはオーエンの協同組合制度の提唱に敏感に反応したのである。

協同組合運動は労働者階級の精鋭分子の手で、労働運動と融け合って、進められた。一八三〇年代のイギリスにおける労働運動の一大昂揚は、労働者階級が、たとえ借りものとはいえオーエン主義によって、ともかくも自からの思想的武装を行なったことと、労働運動が、国民的規模での民主的権利要求の運動たるチャーチズム運動に、結合したこと、とに負うている。この大昂揚は、一八三九年のニューポートにおける鉱山労働者の蜂起をピークに、一大反動攻勢の時期に転じ、めばしいオーエン主義者・チャーチストが大弾圧をうける。かのロッヂデ

ールでの消費組合（“Equitable Pioneers of Rochdale”と名付ける）がオーエン主義者やチャーチストの残類によって組織された一八四四年は、おおむねオーエン主義とチャーチズムの退汐の時点にあたっていたのである。

（注）フランク織物工のストライキの悲運な失敗ということと、失望せる職工組合員に対して、職工組合に代って社会的自由の獲得へのある斗争手段として結合的企業の示唆がなされる（当時の社会主義者の回教師ホリオークによつて）ということに、ロッチデール消費組合のおこりがある。——Beatrice Potter (Mrs. Webb), “The Co-operative movement in Great Britain”, 1891 (= Brenano による独訳書 “Die britische Genossenschaftsbewegung,” 1893. s. 52)。¹ なおこの消費組合のねらいの一つには、工場主のトラック・ショップ（賃金の代りに雇主から交付される手形で物品を引きかえる）制から、織物工たちが自由になろうとする意図も含まれている——Sidney & Beatrice Webb, “The Consumers' Co-operative movement,” 1921, p. 1.

だが、すでにその時期は、第一インターナショナルの前夜にさしかかっているものであり、マルクス・エンゲルスの国際的な労働者階級の組織活動と結びついた著作活動の本格的開始の時期にくびすを接している。一八四八年にはマルクス・エンゲルスの『共産党宣言』が出現する。『資本論』第一巻初版の刊行は一八六七年。こうして十九世紀後半は、労働者階級の社会主義に向つてのかつての信念が、次第に科学で裏づけられた確固たる歴史的確信へと、転化してゆく時代となる。科学の開発という点でいえば、かつてブルジョアジーは自然科学の調期的・創造的發展を歴史の舞台にのせつつ立ち現われたが、プロレタリアートは社会科学の調期的・創造的發展を歴史の舞台にのせつつ立ち現われてきたといえる。

二 マルクス主義協同組合観の展開

およそ今日の常識で賃金労働者の協同組合といえは、資本主義社会で育ちうるのは、消費組合だけであつて、

賃金労働者の生産組合を考えることは六難しい。だが十九世紀前半で賃金労働者の協同組合といえば、生産組合と消費組合との双方を含んで考えられていた。オーエン主義全盛期の労働者協同組合運動によって、実際につくられた協同組合（一八三三年に約五〇〇）は、都市手工業者の販売組合（これは前述の労働パザーの構想と結びつく）と労働者の消費組合（しかもその二つは結びつけられて考えられている）とが主であり、賃金労働者がにぎろうとする生産過程の中核からみれば周辺ではあった。しかし当時はまだ都市手工業から工場制工業への移行を、労働者たちが、仲間のカンパ的出資で、あるいは同調者の出資協力を獲得しつつ、自分たちの手で成しとげ、協同組合工場を組織する可能性がないわけではなかった。当時の資本主義が、先進国イギリスといえども、まだせいぜい繊維工業を近代的大工場の花形におしたてて展開した程度の資本蓄積度合いであったことを思えば、協同組合工場が労働者たちの手の届きうるものと見なされ得たことは不思議ではない。

マルクスは、一八六四年、国際労働者協会（いわゆる第一インターナショナル）創立宣言で、とくに協同組合工場をとりあげ、次の意義づけにおいてその価値を強調した。「この偉大な社会的実験の価値は、いくら過大にみつもっても大きすぎることではない。論議のかわりに行為により、この実験は次のことを示した。すなわち、大規模生産、いかも近代科学の命令にしたがう生産は、労働者を雇用する主人の階級が存在しなくても遂行できること、果実をむすぶには労働手段は労働する人自身を支配し強奪する手段たるを要しないこと、そして奴隷労働や農奴労働のように、雇用労働は一時的な劣った形式にすぎず、よろこんで働く手、はりきった精神、よろこばしい心情をもってその労働にはげむ協同労働に面して消滅すべき運命にあること、これである」（M・E選集・

大月書店版（以下同様）——傍点は引用者）

だが、右の評価は手離しの甘い評価なのでは決してない。マルクスはつづけて断呼としていう——「同時に、一八四八年から一八六四年までの期間の経験は、うたがいの余地なく、つぎのことをしめした。原則においていかにすぐれており、実践においていかに有益であろうとも、もしそれが個々の労働者の偶然的努力のせまい範囲にとじこめられているならば、協同組合労働は独占の幾何級数的増大を阻止し、大衆を解放することも大衆の貧困の重荷を目にみえて軽くすることもけつしてできないであろう。口だつしやな貴族、中間階級の博愛主義的はらふきや、すばしい経済学者までが、急にへどのでようなお世辞を協同組合労働の制度に及びせはじめたのは、おそらくほかならぬこの理由からであろう。……協同労働は国民的規模に發展させるべきであり、したがって、国家的手段によつて育成されるべきである。だが土地の貴族と資本の貴族は、彼らの経済的独占を擁護し永続化するために、その政治的特権を利用するであろう。労働の解放を促進するどころか、彼らは労働の解放のゆくてにあいかわらず、ありとあらゆる障害物をおくことであろう。……それゆえ、政治権力の獲得が労働者階級の偉大な義務となった。労働者階級はこのことを理解したようにみえる。というのは、イギリス、ドイツおよびフランスでは、同時的復活がおこり、労働者政党の政治的再組織のために同時的な努力がなされているからである」(同上、一二—三頁——傍点は引用者)。

第一インターナショナルの代議員には、労働運動の歴史的経過からみて当然のことながら、協同組合活動家が立派な労働者代表として加わっていた(たとえば協同組合の国際的機関雑誌たる『アッシアション』理事会の書記はフランス選出代議員の一人となっている)のであり、インターナショナル『中央委員会代表に対する個々の諸問題に関する指示』をマルクスが行った(一八六七年)なかで、協同組合運動に関する前掲の彼の考え方を、一定の歴史的配慮

のなかで具体化した次のような指示をあたえている。

「国際労働者協会は、労働者階級の自然発生的な運動を統合し、それに統一性をあたえることを目的としているが、どのような学説の体系であろうとも、これを運動に命令したりおしついたりすることを目的とするものでは決していない。それゆえ、大会は協同組合のある特殊な制度を唱導すべきではなく、若干の一般的な原則を宣言するにとどめなければならない。

(イ) われわれは、協同組合運動は階級対立に基礎をおいた現代社会を改造する諸力の一つである、と考える。この運動の大きな功績は、労働を資本に隷属させる、現代の専制的な、窮乏をうみだす制度を——自由で、平等な生産者の連合という共和的で幸福な制度におきかえる可能性を、実際にしめすことにある。

(ロ) けれども、賃労働の個々の奴隷が自分の努力によってつくりだしうるにすぎないような零細企業のおくのなかでは、協同組合運動は資本主義社会を改造することがけつしてできないであろう。社会的生産を自由な協同組合労働の巨大な調和のとれた制度にかえるには、全般的な社会的変化、社会機構の変化、社会の組織された力すなわち国家権力が、資本家・地主から生産者自身にうつることによってのみ達成しうるような変化が必要である。

(ハ) われわれは、協同組合商業よりも協同組合生産に着手することを、労働者にすすめる。前者は現代の経済機構の表面にふれるにすぎないが、後者はその基礎をほりくずすのである。

(ニ) われわれは、すべての協同組合が、その総収入の一部をさいて、協同組合原理の宣伝機関にあてるとをすすめる。この宣伝は行動ならびに言葉によって、いいかえれば、あたらしい協同組合工場の設立に協力

するとともに、その学説をひろめることによっておこなわれる。

（ホ） 協同組合団体がありきたりのブルジョア的株式会社に転化するのをさけるために、各企業の労働者は株主であるかないかに関係なく、収入における平等のわけまえをうけとらなければならぬ。われわれは、まったく暫定的な措置として、株主が小額の利子をうけとるのをゆるすことに賛成する」（M・E選集二巻二六〇—二六一頁——傍点は原典）。

一八七一年のバリ・コンミューンは、たとえ一時的とはいえ、プロレタリアートが国家権力を掌握した史上最初の出来ごとであった。その経験を、マルクス・エンゲルスは些細に検討した。それによって学びとった最大のものは、革命初期のプロレタリアートの権力構造はいかなる形態で発展するかということ、その必然性において理解することであった（その理解は後年のロシア革命での、レーニンの指導によるソヴィエト権力形態の源流をなした）。このことは一般に知られていることであるが、ここでさらに次のことを指摘しておきたい。コンミューンは権力掌握のあと、間髪を入れずに、協同組合制度を採用したということ、これである。「四月十六日、コンミューンは、工場主によって閉鎖された工場を統計でしめすこと、ならびにそこでこれまで働いてきた労働者が協同組合を組織し、その労働者がその工場を経営するための、またその組合の一つの大きな同盟に組織するための計画を作製することを、命令した」（エンゲルス『フランスの内乱』「第三版への序文」一八九一—M・E選集二二巻三七九頁）。

後年のロシア革命においても、ソヴィエト権力は、いちはやく、協同組合政策にとり組んだ。一九一八年十一月、レーニンは『モスクワ中央労働者協同組合代表者会議での演説』で、きっぱりとこういった——「協同組合組織の網がなければ社会主義経済を組織することは不可能である」（レーニン全集二八巻一七八頁——ページ数はマル

クス・エンゲルス・レーニン研究所版、訳文は大月書店版（以下同様）と。またこうもいった——「協同組合は、高く評価して利用すべききわめて大きな文化的遺産である」（同上、一七九頁）と。もちろん後で述べるように、協同組合はブルジョアの改良主義者、アナルコ・サンデカリズムの左翼冒険主義者、日和見主義者、メンシェヴィキ、エス・エル右派、その他一切の小ブルジョアの協同主義者たちに絶好のすみかを提供していた。革命に際して、古い協同組合活動家たちはひそかに反革命の側に廻り、自衛軍に通じたものがなくなかった。だが協同組合活動家の反革命的意図をとり除く斗争を、協同組合機関に対する斗争と一しょくたにすることはできなかった。人民委員会議は、共に進むことができるすべての人々をひき入れて進むという見地から、協同組合活動家との協定をとげた。当時、労働者協同組合代表者会議は「共産主義者の人民委員たちのほかに、民間協同組合の代表が出席した唯一の会議であった」（同上二七八頁）といわれる。

「協同組合は、もしも土地が社会化され工場が国有化されている社会全体を包括するならば、社会主義である。ブルジョアジーが政治的、経済的に収奪されたあとでは、ソヴィエト権力の任務は、あきらかに（主として、協同組合組織を社会全体に押しひろめ、この国の全市民を一人のこらず、一つの全国的な、もっと正しくいえば、全国的な協同組合の組合員に変えるという点にある」（レーニン『ソヴィエト権力の当面の任務』の最初の草稿——全集二七卷一八九頁）。

三 資本主義の消費組合と社会主義の消費組合

社会主義思想と結びついた労働者協同組合運動の華形ともいえるべき協同組合工場の企図は、資本の集積——集中

の進行を土台に産業の華形が軽工業で代表された時代を過ぎ重工業が第一線に浮び上ってくる時代、巨大産業と巨大銀行との結合が必然化しつつある時代(発展の先頭にたったイギリスでは一八七三年にはすでに独占資本主義への移行が始まっている)がしのびよってくるにつれて、次第に急速に見込みのないものになってくる。労働者の協同組合運動といえは、要するに消費組合運動だということになってくる。

一方、十九世紀の半ば以降には、資本主義的發展のなかで取り残された都市や農村の小ブルジョアジーの協同組合運動がヨーロッパの大陸側で抬頭してくる。ライプハイゼン(Friedrich Wilhelm Raiffeisen, 1818~1888)によって農業者の信用協同組合の最初の試み(Flammersfelder Hiltverein)が始められるのは一八四九年、シュルツ・デリッシェ(Franz Hermann Schulze-Delitzsch, 1808—1883)の都市手工業を主とした信用組合(Vorschussverein)の発祥は一八五〇年である。

以上の双方の事情を背景に、協同組合は、次第に、左右あらゆる種類の改良主義・協調主義の温床となっていた。

消費組合活動家の墮落は、要するに革命への確信から遠ざかってゆく点にあった。その論理からしてはフロレタリアートによる権力の問題を提起できないオーエン流の思考方法の未熟さは、協同組合活動家に長くつきまわって彼らの社会改造への確信喪失を助けた。さらにそれが農村の小ブルジョア的(封建的要素をもたっぷりとまといつけた)協同組合の広汎化と結びついた場合に、鼻もちならぬ協同組合至上主義の発生をうながした。

(注) 空想的社会主義者に共通の特徴、すなわちサン・シモン(Saint-Simon, 1760~1825)、フーリエ(Charles Fourier, 1772~1837)はもとより、オーエンにも共通の特徴は、先ずある一定の階級(次代をになうフロレタリアート)を解放し

ようとはしないで、直ちに全人類を解放しようとした点にあり（エンゲルス『空想より科学へ』前掲書一八頁）、そういう立場からはプロレタリアートという特定階級の権力問題は意識化され得ない。とはいえ、ここでついでに次のことを述べておきたい。オーエンのみならず、サン・シモンもフーリエにも共通にいえることとして、十九世紀に新らしくひらけた産業に背をむけず、その産業が作り出した諸条件を彼らの思考の中核にとりこんで、将来の理想を描いたという点の偉大さに注目すべきである*。

この点は社会主義＝共產主義への理想の根柢を古い農村のアルテリヤ、コザックの共同体等々にもとめた——新らしい産業が作り出した新しい諸条件に、彼らの理想のより新しい根柢を求めずして——ロシアのエス・エルヤ、ナロードニキヤ、フランスのサンデカリスト、十九世紀末のマルクス主義修正派（ダヴィッド、ベルンシュタイン等々の手あい）よりも空想的社会主義者の方がどれだけ、ほんものであったかわからない。もちろん空想的社会主義者の発想形式は、ブルジョアの観念論の衣服をまとっていた。しかし客観的事態の成熟が、まだいちぢるしく未熟な時代（ブルジョア社会がまだ一般には封建社会に対して、すべての階級の解放として目に映っていた時代——従ってブルジョアの啓蒙思想が社会のフット・ライトをあびていた時代）に、そのブルジョアの啓蒙思想が描いた十九世紀の理想像が、理想とは、似てもつかぬものであるということを主張するのには、ブルジョアの啓蒙思想の発想形式を用いたということが、どうしてとがめられようか。

* その証明には、彼等の著書目録の若干をあげるだけで充分だと思う。

サン・シモン——

○一九世紀の科学的研究の序論（一八〇八）“Introduction aux travaux scient”.

○人類科学覚え書（一八一三）“Memoire sur la science de l'homme”.

○万有引力に関する研究（一八一四）“Travail sur la gravitation universelle”.

○産業、又は政治・道徳及び哲学問答（一八一四）“L'industrie, ou discussions politiques, morales, et philosophiques”.

……（省略）

フーリエ——

○四運動および一般的運命の理論（一八〇八）“Théorie des quatre mouvements et des destinées générales”.

協同組合とマルクス主義（井上）

○産業的および社会的新世界（一八二九）“Le nouveau monde industriel et sociale.”……（省略）

*** 四運動とは、物質的運動、有機的運動、動物的運動および社会的運動の四ツであり、要するに社会発展の法則性を運動としてとらえていることは明確である（以上の傍点はすべて引用者の強調点）。

オーエン流の社会主義すらからも訣別した俗流的協同組合主義者は、協同組合制度の祖先の祭壇に、オーエン主義末期におけるロッヂデール消費組合の、いわゆる五原則（一人一票、時価販売主義、現金販売主義、剰余金処理方針、政党・宗教からの中立原則）をまつりあげ、これを死せる教条と化した。もともとの四原則自体は、たとえば、その「一人一票」の原則にしても、それは委任を許さず、また既婚女子財産法が陽の目をみる四十年もまえに、妻を夫から独立の組合員として扱うことを敢行する（夫をもって妻の時金の所有者とみなす地方裁判所の見解に抗して）という生きいきした闘いの内容をもっていたのに。「時価販売」の原則といわれるものについても、それは周囲の競争の立場にある小商人たちからの反感をさけ、当時社会から破門されていた社会主義者の行動を住民から浮き上らせないという配慮を含んでいたし、さらに剰余金の一部を教育目的に積立てる原則についても、それは社会改造資金の捻出というオーエン主義の前述の伝統に根ざすものであり、そこにいう教育とは後年の協同組合至上主義者が考えるような改良主義・協調主義の宣伝ではなく、社会主義思想一般の宣伝であったのに。

（注） Beatrice Potter (Mrs. Webb), Herausgeber von Lujo Brentano, Ibid. S. 63.

それはともかくとして、労働者運動としてつくられたオーエン主義協同組合では、手工業者の Producer's Store のタイプと工場労働者の Consumer's Store のタイプとが、工場労働者の指導の下で結びつけられており、ロッヂデール消費組合にも前者の機能が融合して考えられていた。だが、ロッヂデール以降数年ならずして、前者の機能はも早注目されなくなり、消費組合運動は Consumer's Store の方向に導かれた。キリスト教社会主義者

(F. D. Maurice, Charles Kingsley 等にひきいられた)の登場が、そういう方向へ協同組合運動をみちびき入れるのに役割をになった。さらに「ホリオーク (George Jacob Holyoake) のような人物」が協同組合運動をますます俗流的アジテーションに変えて行くのに手を貸した。^(註1)

(註1) G. D. H. Cole, "A Short History of the British Working Class Movement", 1925, Volume II, p. 35.

(註2) Cole, Ibid. p. 38. (「内の表現はコールによる」) なお、ホリオークのことをウエップ夫妻は「middle-class idealist」と呼んでゐる——Sidney & Beatrice Webb, Ibid. p. 184.

日本ではホリオークの「The History of Co-operation», Vol. 2, 1878. が早くから紹介され、これが日本の協同組合界に俗流的協同組合思想を正当づけるに役立った。

レーニン^(註3)は、社会民主党内の日和見主義と闘うなかで、消費組合については、その資本主義のなかでの限界を強調した。それは一九〇五年にかかれた『イスクラの戦術の最後の言葉』のなかにみられる。なるほど「消費組合はプロレタリアの現実の力であり、現実の地位の獲得であり」、「消費組合で労働者が獲得する技能が非常に有益であることは争われない」。「われわれは、消費組合がある意味では社会主義の一片であることに同意する」。「弁証法的な発展過程は資本主義の限界内にさえ、実際に新しい社会の諸要素を、その物質的・精神的諸要素を、入りこませはする」。だが、「権力がブルジョアジーの手中にある間は、消費組合はみじめな一片であつて、なんら重大な転換を保障せず、なんら決定的変化をもたらさず、ときには変革のための真剣な闘争から脇道へそれさせえする」。プロレタリアートへの権力移行(すなわちその権力への生産手段所有の集中)があれば「そのとき^(註4)は、消費組合組織は剰余価値をも自由^(註5)に処理できるようになるであろうが、いまはこの有益な施設が適用される範囲は、賃金の額が貧弱なために、どうしても貧弱な状態となる運命をもっている」——(以上、いずれも全集九卷

三四二—二頁より——傍点引用者）。

（注）筆者の旧著『日本産業組合論』一九三七年（増補改訂版『日本協同組合論——理論と史的分析——』一九四九年）では、消費組合が資本主義社会のなかでは剰余価値を自由にできるところか、うまくいってもせいぜい商業利潤の一部の節減にしか喰いこめない点を理論的につき込んでみたのであった。

一九二〇年のコペンハーゲンの国際社会主義者大会におけるいくつかの小委員会のなかで、レーニンは協同組合小委員会で活動し、協同組合を改良主義的幻想のなかに閉ちこめようとする修正主義者と闘って、プロレタリア協同組合を階級闘争の水路に引き込む契機をつくった。その際重要な役割を果たした『協同組合についての大会決議草案』（レーニン起草）には、資本主義のなかでの消費組合の限られた意義の強調と、その条件のなかでのプロレタリアの階級闘争上の役割とが、総括されて打ち出されている。

「大会はつぎのことをまとめる。——

（一）プロレタリア協同組合は中間搾取をへらし、商品供給者のもとでの労働条件に影響をあたえ、職員の状態を改善することを可能にする。

（二）プロレタリア協同組合は、ストライキ、ロックアウト、迫害その他のさいに援助をあたえることによって、大衆的な経済闘争と政治闘争においてますます重要な意義をもつようになっていく。

（三）プロレタリア協同組合は、それが労働者階級の大衆を組織するときには、労働者階級に事業を自主的に運営し消費を組織することを教え、将来の社会主義社会で経済生活の組織者の役割をはたせるように、この分野で労働者階級を訓練する。

大会は他方で次のことをまとめる。——

(一) その収奪が社会主義の重要目標である当の階級的手中に生産手段と交換手段がのこっているあいだは、協同組合の達成しうる改善は、きわめて狭い範囲にかぎられている。

(二) 協同組合は、純商業的な施設であり、また競争の諸条件に圧迫されているため、ブルジョア的な株式会社に退化する傾向がある。

(三) 協同組合は、資本と直接に闘争する組織でないのに、社会問題を解決する手段であるかのような幻想を生みやすいし、現に生みだしている。

大会は、それゆえ、万国の労働者につぎのことを呼びかける――

(イ) プロレタリア協同組合に加入し、その組織を厳密に民主主義的な精神(低額の加入金、一人一株、その他)で導きながら、その発展を全面的に促進すること。

(ロ) 組合内で倦むことなく社会主義を宣伝・煽動することによって、労働者大衆のあいだでの階級闘争と社会主義との思想の普及をたすけること。

(ハ) 協同組合のなかで社会主義意識が成長するにつれて、協同組合と社会主義者の政党とのあいだに、またそれと労働組合とのあいだに、有機的な結びつきをつくり、強めること。

(ニ) それと同時に、大会はつぎのことを指摘する。生産協同組合が労働者階級の闘争にとって意義をもつのは、それが消費組合の構成部分であるばあいに限られる」と(全集一六卷二三九―四〇頁)。

この一九一〇年のコペンハーゲン大会(第二インターナショナル)におけるレーニンのプロレタリア協同組合の運動方針を、前掲の一八六七年の第一インターナショナルへのマルクスの協同組合問題への指示とくらべてみるこ

とは、誰にも興味あり、且つ有意義なことを考えられる。基調はもとより一貫している（とくに権力掌握の問題との結合という点で）が、協同組合運動についての強調点がちがっているのは、資本主義経済の発展段階の差と、労働者の組織化と労働運動の発展度合いの決定的な差とにもとづくであろう。

前時代では労働者協同組合の社会主義に対する啓示的な意義が強調されたのに対し、後時代では労働者協同組合の意義の強調はある限定された範囲にしばられる。前時代に強調された協同組合工場の意義は、後時代にはせいぜい消費組合の附随工場にしか認められなくなる。だがそれは労働者の力量の後退のせいではない。それは社会的生産手段の少数資本家による独占を強化するところの資本蓄積の巨大化の結果であるとともに、労働者の集結する職場規模の巨大化と労働組合成長の急速化の結果である。というのは、プロレタリアートが、国家権力を掌握し、生産手段をその国家の所有に移しさえすれば（そのことにさえ邪魔が入らなければ）、労働者がみずから行政機関へ参加しつつ工場生産を管理する道は、二十世紀の資本主義国では、すでに生産協同組合制度の手を借りずに準備されているといつてよいからである。その際労働者協同組合に期待される主要課題は、全住民を消費組合に組織化することを通じて、供給―分配の新しいコミュニティの秩序に移行させるという問題におのずとしばられてくるであろう。コペンハーゲン大会草案が資本主義社会での闘う労働者協同組合の意義づけを消費組合に限定しているのは、将来への右の見透しにも、しっかりとつながっていると考えられる。

四 資本主義の農業協同組合と社会主義の農業協同組合

1 プロレタリアートの農民政策と農業生産の社会主義的協同化

十九世紀が後りに近づくころには、ヨーロッパの社会主義労働者政党は、すでにブルジョア議会に彼らの代表者がある程度送り込む（ドイツ、フランス、ベルギー）までに成長した。それにつれて、プロレタリアートは、かれら自身の力の結集だけでなく、いまや都市から農村に進出し、幾千万の農民を反動勢力の掌中からもぎとり、それを味方の勢力として引き入れねばならぬという問題に真剣に立ち向いはじめた。

それを引き入れうるという根拠は次の客観的事態の進行そのもののなかにあった。すなわち資本主義の発展は、時代おくれの小生産形態の農民経営の不利を拡大し、農民の日常生活をますます危なかしいものとしてゆく。このことに基づいて、ブルジョア国家の農民掌握の力は次第に空虚なものとなってきた。他方、喰えなくなった農民の賃労働兼業化の進展、すなわち半プロ化は、農民をプロレタリアートの政治的立場に導びく自然の水路の役割をしている。客観的事態の進展はこうして労働者と農民の間の距離をちぢめる方向にうごいている。

とはいえ、生産手段のかけらといえども、それを持っている農民の立場は、生産手段を全く持たない労働者の立場とは、おのずと異なるものがある。この相違を尊重しつつ、農民を、農民たるままで（すなわちプロレタリアートは農民を仲間に引き入れることを望むために農民の没落をいくらかでも期待したり早めたりするのでは断じてない）、プロレタリアートの側に結束させるためには、次の点でのプロレタリアートの方針を農民に明確化するとともに、農民経営の協同化へのプロレタリア的援助という前途を指し示す必要があった。すなわちプロレタリアートが革命によってその手に収めようとしている生産手段は、大資本・大地主の手に集積した巨大な生産手段なのであって、農民の手にある古びた生産手段のかけらなどが問題なのではないということ、そして革命後のプロレタリアートこそは、農民がかれら自身の仕事として、巨大な大規模農業生産を、協同組合制度を通じて作りあげる道を、援

助する手段をもっているのだということを。

一八九四年におけるエンゲルスの『フランスとドイツの農民問題』は、当時、社会主義者たちの間での農民政策論争が沸騰するなかで、右の農民政策の基本点をさし示したものであった。「われわれが国家権力をにぎった場合、大地主の暴力的収奪はやらなければならないであろうが、小農民をもそうすることは考えることさえでない（補償しようがしまいが同じことである）。小農民にたいするわれわれの任務は、なによりもまず、力ずくではなしに実例によって、またそのための社会的援助を提供することによって、小農民の私的経営と私的所有を協同組合的な経営と所有に移しかえることにある」（M・E選集一七巻、四四七頁）とそこに書かれてあることは、政權獲得後のレーニンの協同組合計画（社会主義建設の一般計画の一構成部分となったところの）によって実践に移された。そしてその実践は、社会主義国家のもとでの農業の生産協同組合発展の法則性についての認識を深めた。さらに第二次世界大戦後には、人民民主主義諸国での相つぐ豊富な経験が、その法則的認識を發展させたことはいまでもない。

ここで少なくとも次のことがはつきりしている。すなわち小農民経営の協同組合化には、革命後にもかなりの期間の過渡期が必要だということ、がそれである。というのは、工業の社会主義的改造のための物質的条件は、資本主義の發展そのものによって、資本主義社会のなかで準備されたが、おびただしい小農民経営をとり残しながら資本主義が進んだ農業の領域では、その社会主義的改造の物質的条件そのものを、社会主義国家がととえてかかる必要があるからである。すなわち「生産技術・農業技術・土地整理・商品取引・財政・信用・価格などの面での系統的な一連の経済的措施によって、国家と農民との経済的結びつきが拡大され、農民経営と小商品

生産的經濟制度に対する国有工業と社会主義經濟制度の影響力が強まる」(ソ連邦科学アカデミー「經濟学教科書」第4増補改訂版、邦訳、新日本出版社版三卷八六頁) ことが、農業生産の協同組合化の發展、最初は低い形態のものから高い形態のものへの大々の發展、を保證する条件となる。

ところでこの過渡期には、傍らで國家の援助による小農民の協同生産への移行がおしすすめられるとともに、社会主義國家は「一方では、勤勞個人農經營がある程度發展する可能性を保證する。このことにもとずいて、國家と個人經營とのあいだの相互關係がうちたてられている」(同上)。これは一面での資本主義分子の絶えざる發生を覺悟してのことである。農民の社会主義的協同組合化は、貧農と中農を主体に、下からすすめる運動として展開するのであり、協同化のさまたげとなる富農・資本主義的分子の發生にたいしては、階級闘争の展開が予定されているのである。

さらにまた、農民經營の生産協同化の發展について法則的にいえることは、農民の私的土地所有を解消すること、不可欠的な重要課題となることである。ソ連邦では、その課題は、革命の第一着手に先ず、すべての土地が、勤勞農民的土地所有をもふくめて、国有化される、という道順ですすんだ。だが土地国有のもとでも、農民の個人的經營が存する限りは、個人的用益權の事実上の發生(小商品生産の階層分化にとまなう富農への個人的用益權の事実上の集中)はさけられないのであり、それは結局は、貧農・中農の下からの富農に対する階級闘争の進展と相まつところの、生産協同組合の大々の發展が勝利に帰することによって、消滅に導かれたのであった。中華人民共和國では、小農民の私的土地所有は、はじめの低い型の生産協同化の段階ではまだ公認された。ただしそれらの私的所有地を協同組合への個々人の現物出資に誘導することによって、それらの土地の用益權だけは組合に

集中し、しかしてやがて、協同労働の成果があまり組合がヨリ高い型の協同組合に向って進むにしがって、私的所有を組合所有に移すという道順を踏んで、私的小土地所有を消滅に導いた。

ブルジョア諸国でも改良主義的企図から、農業での生産協同組合が語られ、あるいは断片的に誇示されることは、しばしばあるのだが、それらが果して本気かどうかは、私的小土地所有の消滅の問題にまじめに取り組むつもりがあるかどうかで、ためされ得る。私的所有制一般を傷つけずに、土地だけの私有制の廃絶をはかるなどという条件が、いまの資本主義にありえよう筈はないのである。

2 流面・信用部面だけ繁茂する資本主義の農業協同組合

ここで、資本主義社会の農業領域での協同組合をかえりみよう。オーエン時代の協同組合生産の実験には、その農村版もないわけではなかった。オーエン自身が一八二〇年代に北米ルイジアナ州の開拓地で手がけた新しい共産村（一八二六年に“The New Harmony Community of Equality”と名付けられた）の実験はそれであるし、一八三〇年にはアイルランドのバンダリェウル（Bandelaur）^(注)が、オーエンに見習って彼のララハイン（Ralahine）の農場を農業労働者の生産協同組合経営にゆだねた。それらはいずれも当時にあつての最優秀の施設をそなえたのである、近代工業と同じように、近代農業も協同労働で充分にこなし得るものであることを実証したという点で、評価をうけている。とはいえ、それらは歴史の片隅での偶発的なエピソードにおわった。

（注） Karl Kautsky, “Die Agrarfrage”, 1899, S. 124~126. 又 Charles Bray, “Philosophy of Necessity”, II, p. 581. からの引用によって、ララハインの詳細な経過と成果の「リポート」が収められている（邦訳、国民文庫版、二〇一〜二〇六頁）。

生産協同組合が育つのは、資本主義社会は、工業の領域でも農業の領域でも、要するに不毛の地であった。

小生産者たちが資本主義社会での大規模経営の有利性にあやかるために、協同組合生産を組織することは、都市の手工業者の間で、あるいは農業者たちの農産加工部面の事業でたえず見られたが、おおむねそれらは、やがては株式会社へ移行して行った。その場合、協同組合制度は資本主義企業形態の幼虫にすぎなかったのであり、協同組合は社会主義への過渡でなく、資本主義への過渡にすぎなかった。

農産加工の分野でなく農業の本来の農耕分野では、農民の生産協同組合は一層育ちがたかった。というのは農業では、とくに小農民の小さく細分された土地所有（不安な資本主義の環境のなかでは各自が自己防衛本能によって一層かたくしがみついている小土地所有）が、協同による大規模生産への見透しをさまたげる壁となるからである。もちろん古い共同体の遺物に慣らされているという面からいうならば、小農民たちには、共同労働ということ自体はむしろ受け入れられ易いといえよう。がその面での共同は近代的協同組合における共同労働とは凡そかけはなれたものである。というのは後者の協同労働は、大規模生産、しかも近代科学の命令にしたがう生産を直接生産者たち自身がわがものにせんがためのものに他ならず、近代的生産手段と結びつかねばならないものだから。

古い農村共同体における共同労働と近代的協同組合労働との見さかいのない混同は、十九世紀末の社会主義者の間の農業・農民問題論争の時期におけるマルクス主義修正派のいちぢるしい特徴の一つとなった。かれらはマルクス主義が工業にしか通用せず、農業の領域では、資本主義がもたらした事態を基礎にせずに、社会主義に到達できると考えた。また右の混同は、ロシアでは、エス・エルやナロードニキの次の思想の温床となった。すなわちロシア社会は西欧とちがって、農村の古いアルテリを基礎に非資本主義的に社会主義への進歩をたどるとの

思想。

それはともかくとして、ヨーロッパ大陸の農村では、十九世紀の中葉以降にあらわれてきた信用や販売・購買の分野の農業協同組合が、十九世紀の終り頃には、農村の経済生活に不可欠な存在となるまでに、繁茂してきていた。それ自体としては成り立たない協同組合生産も、もしそれが流通分野の農業協同組合に附随的な加工部門としてならば、その場合にだけは、どうやら成り立つのであった。

信用や流通分野の農業協同組合が隆盛にむかう条件は、資本主義経済の発展のなかで農業領域がおかれた特殊な状況にあった。資本主義の発展は、工業に対する農業の発展の立ちおくれを次第に顕著にしてきたこと、さらに農業の資本主義的発展のなかには、資本制生産様式に純一化されないおくれた諸関係と小生産者の生産を残して進んできたこと、これらのことが相まって、資本主義経済の総過程に生ずる矛盾を調整する役割の一端を、信用・流通分野の農業協同組合になうようになったのである。すなわちそれらの農業協同組合はおくれた農業生産の領域を発達した資本主義の信用と流通の機構に結びつけるパイプとして、資本主義諸経済制度の一構成部分となったのである。^(注)

(注) 前掲旧著『日本産業組合論』は、その約三分の二がこの点の日本での具体的分析にむけられた。

しかし、社会主義国での農村の協同組合建設が、貧農・中農に依拠して進んだのとはまさに逆に、右の農業協同組合は、大農業者や富農に依拠して進んで行った。それ自身がブルジョア社会の企業としてある農村協同組合は、その企業としての安全を確保するためからいっても、組合員のなかで経済力の強いブルジョアジーないしブルジョアの分子への依拠をますます強めざるを得ないのである。一八九八年に執筆されたカウツキーの名著

『農業問題』には、農業協同組合の組合員のうち、組合を利用することによってヨリ多くの利益を引き出ししているものは誰かという面から、多くの検討が加えられ、農業協同組合が農村ブルジョアジイやブルジョア的分子をたえず強化していることが立証されている。

さて、ここで再び社会主義国に目を転じ、もっぱら信用や流通部面を扱う農村の協同組合が、革命後の過渡期の経済のなかで演じた役割を展望しよう。

その過渡期の経済とは、一方で社会主義大工業、他方で小農民経営という、極端に次元のちがった制度をもつ経済である。信用や流通部面をあつかう農村の協同組合は、第一に、この過渡期のなかで、おくれた小農民経営の分野を、社会主義大工業の分野につなぎとめる橋渡しの役を演じた。

第二に、それらの流通と信用の協同組合は、はじめはその規模とは比較にならない小さな規模で生れてくる生産協同組合の助産婦の役割を演じた。ついでその生産協同組合がヨリ高い形態へ、ヨリ大きな規模へと発展してくるにつれて、流通・信用協同組合は、それにつかえる奉仕者になる。

この流通協同組合を通じて社会主義工業から、農民へ供給される物資も、消費物資の供給が次第に減じ、かわって生産手段供給の比重が高まる。一方、個人的消費物資だけを取りあつかう機関として、都市と同様に農村でも消費組合が大きな役割をになうようになる。このような農村を抱括する協同組合商業の拡大が、国営商業と相まって、商品取引から最終的に私的資本をしめ出して行くのである。

五 結 び

以上は、協同組合の、それも各種協同組合についての、資本主義のはじめから社会主義の時代のはじめにまで及ぶ、さまざまな消長を含んだ発展の、弁証法的把握である。かつて協同組合至上主義者は、社会構成体の諸段階によって異なる経済法則の支配を無視し、協同組合そのものの独自の発展を宙に描いた。しかし、諸段階における経済法則の支配の独自性についての理解に透徹したものだけが、最後に、協同組合の真面目の発揮者となったのである。

（一九六四・五）

〔附記〕 筆者はいまから三十年前における数年間を、縁あって協同組合研究に従事した。それ以来、協同組合研究からは、全く離れていたのだが、ある事情からたまたまマルクス主義の協同組合観について筆をとらざるを得ない破目になった。そこでかねて長い間それとなく気がかりになっていたことを、整理してみた。ただ残念なことには、この整理が目下の協同組合運動の具体的次元に、役立つのか、それとも役立たないかを、筆者は寡聞にしてわきまえていない。その点は、目下の協同組合運動家の教示を得たい。